

報道関係各位

平成28年5月11日

高校生以上の学生対象・がん検診でがんの早期発見を訴える

第4回がん征圧ポスターデザインコンテスト 日本大学芸術学部 山本沙羅さんの作品が最優秀賞を受賞

最優秀賞



山本沙羅さん(日本大学芸術学部1年)『身体の中の悪いやつ』

高校生以上の学生を対象に公募した「第4回がん征圧ポスターデザインコンテスト」の入賞作品(最優秀賞1点、優秀賞3点)が決定しました。このコンテストは、若い世代に「がん」や「がん検診」について知ってもらい、新鮮な発想でがん検診の受診を呼びかけるポスターを作成することを目的に開催しました。

最優秀賞の山本沙羅さん(日本大学芸術学部1年生)の作品は、ポップアートのような明るい色使いで、かわいらしさと同時に、どこか怖さも感じるデザインが評価されました。また、初期のがんはほとんど自覚症状がなく自分ではわからないということ、シンプルにわかりやすく伝えている点も高く評価されました。

最優秀賞は、佐藤凌介さん(金沢美術工芸大学3年生)、西本未祐さん(専門学校札幌デザイナー学院1年生)、石元隆文さん(秋田公立美術大学1年生、日本大学芸術学部1年生の丸山凜さんとの共作)に決定しました。

最優秀賞の作品はポスターにして、全国の自治体、保健所、病院などで約5万部掲示される予定です。

【作品説明】

一見すると健康そうな人の中でも、知らぬ間にできて大きくなるがん。それを、野菜の内側から食い荒らして成長する青虫に例えて表現しました。

病院などで見かけるポスターは、暗く怖い印象のものや、文字中心のシンプルなものが多い印象なので、暗くならないよう、若い人にも興味を持ってもらいやすいよう、ポップな絵柄と温かみのある色合いを心がけました。

【審査員 本田亮先生の講評】

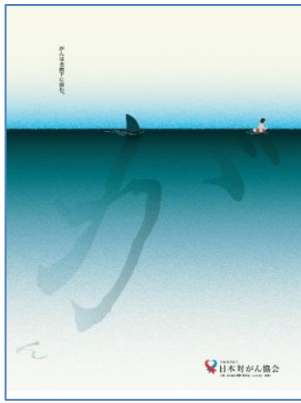
暗くなりがちテーマを明るくポップに仕上げています。表現は可愛いですが、キャッチはガンの本質をうまくとらえている。気づかぬうちに大きくなってしまいうガンを芋虫に例えたユーモアにより、幅広いターゲットに訴えることができる。

ピーマンの1つ1つにもう少し変化をつければ、さらに見応えのある作品になったのではないかと思います。

詳しくは「がん征圧ポスターコンテスト 公式サイト」(<http://www.jcsposter.com/>)をご覧ください

※学年は2016年3月の応募当時

優秀賞



佐藤凌介さん
(金沢美術工芸大学3年)
『水面下に潜む』

病院などで掲示されるポスターは情報や文字が多い印象ですが、細かい文字まで読む人は少ないと思い、文字だけに頼らない、ビジュアルで勝負できるポスターを制作しました。がんの脅威を「水面下」というキーワードをもとに「鮫」に置き換えて視覚化することで、見る人がハッとするような効果意識して制作しました。

【講評】

仕上げのクオリティが高い作品だ。ガンの文字の一部をジョーズのヒレにして、迫りくる恐怖をスマートに恐ろしく表現している。

しかし、ビジュアルを重視しすぎたがために、ポスターというよりアート作品に見えてしまった。

ポスターとして割り切るとさらにメッセージが強くなったと思う。



西本未祐さん
(札幌デザイナー学院1年)
『がんを見つけて、良かった』

がんは「不治の病」ではなく、早期発見すれば可能性は変わると知り、検診・早期発見への前向きな思いを込め制作しました。「恐怖」の表現だけでは、敬遠されると思い、ビジュアルは柔らかさを意識して制作しました。

写真も自分で撮影しました。肌 directly 「癌」の文字を書いた意図がきちんと伝わるかどうか、悩みました。

【講評】

言葉の強さにドキッとした。「がんを見つけたこと」に対して「良かった」という言葉を組み合わせが実に大胆。

ビジュアルも温かくシンプルで強い。しかし、お腹に書いている文字が少し乱暴だと思った。細かい所を妥協しなければさらに作品のクオリティが上がったと思う。



石元隆文さん／丸山凜さん
(秋田公立美術大学1年／日本大学芸術学部1年)
『だから、早めのがん検診』

がんの問題は自分だけではなく、周りの人にとっても重要な問題だと気づきました。検診を受けるのは自分自身のためでことを伝えるポスターはたくさんありますが、自分にとって大切な人のためでもあるのだと感じられれば、がん検診に行こうと思うのではないではないかと考え制作しました。

【講評】

キャッチフレーズが心に残った。顔をささずに大胆にフレームを切ったレイアウトと、「となりにいるひと」という言葉によって、誰もが自分の愛する人を思い浮かべてしまう構造がうまい。

しかし、全体のトーンが平和すぎて病院に掲出される多くのポスターの中で目立ちにくいのではないかという意見があった。



2016年4月13日に行われた審査会の様子

<審査員> (敬称略)

※前列右から

本田亮 (クリエイティブディレクター)

廣村正彰 (グラフィックデザイナー)

※後列右から

塚本章人 (日本対がん協会常務理事)

秋山歌太郎 (日本対がん協会理事長)

岸田徹 (がん経験者／「がんノート」総合プロデューサー)

大谷剛志 (厚生労働省健康局がん・疾病対策課課長補佐)

中川恵一 (東京大学医学部附属病院放射線科准教授／放射線治療部門長)

本橋美枝 (日本対がん協会広報グループマネージャー)

※学年は2016年3月の応募当時

<応募者> 高校生・高等専門学校生・専門学校生・短大生・大学生・大学院生 <募集期間> 2016年1月12日～3月31日
<エントリー者数> 94名 <応募者数> 34名 (男女比=3:7) <応募作品総数> 35作品